

XI 付 録

- 1 京都大学学歌
- 2 学生歌
- 3 応援歌
- 4 逍遙の歌

1 京都大学学歌 (昭和15年1月18日制定)

- | | | | |
|---------|---------|---------|---------|
| (1) 九重に | 花ぞ匂へる | (2) 緑吹く | 樟の葉風に |
| 千年の | 京に在りて | 時の鐘 | 継ぎて響けば |
| その土を | 朝踏みしめ | 人の世に | まこと立つべく |
| その空を | 夕揚げば | 現身に | まこと立つべく |
| 青雲は | 極みはるかに | たまきはる | 命をこめて |
| われらの | まなこをむかへ | いしずえ | 堅く築かん |
| 照る日は | ひかり直さし | 伸びゆく | 強き力の |
| われらの | ことばにうつる | 日出づる | 国の子我等 |



初代総長 木下廣次先生の揮毫

水梨 彌久 作詞

下総 皖一 作曲

♩ = 138位
軽快に

mf やや荘重に

(一) ココノエニハク
(二) みどりふくハク

f

ナゾニホヘルセンネンノミヤコニアリケ
スのはかぜにときのかねつぎてひびけ

mf *mf*

テソノツチヲアシタフーミシメソノソラヲユ
バひとのよにまことたつべくうつせみにま

mp 快活に

ウベアヲゲバアオグモハキワームハこたとつべく
たまきはるいのちを

mf

ルカニワレラノマナコヲムカヘテルヒハヒカリタダサ
こめていしずえかたくきづかんのびゆくつよきちから

f *ff*

シワレラノコトバニウツルー
のひいづるくのにこわれらー

学歌は、昭和15年（1940年）1月18日、告示第1号によって制定されたものである。

その歌詞は、前年の5月から11月にかけて学内で公募されたもので、その応募作品から1等に選ばれた昭和13年本学文学部国語国文専攻卒業生の水梨彌久の作品である。

また、作曲は、当時、東京音楽学校の助教授であった下総皖一に依頼したものである。

—「京都大学70年史」による—

2 学 生 歌

長崎 太郎 作詞

芥川 徹 作曲

Tempo di Marcia

(♩ = 114)

ヒカリアフルルーアオーゾラニムゲ
 シノトキラキザミツツユ
 キーテカエラーヌセイシュノート
 オトキイノーチハグークミテマコ
 トノミチニハゲーマシムワレ
 ラノホコーリガクーントオ

- | | | |
|-----------------------------|-------------------------|--------------------------|
| (1) 光溢るる蒼空に
尊き命育みて | 無限の時を刻みつつ
真理の途に励ましむ | 逝きて帰らぬ青春の
吾等の誇学の塔 |
| (2) 嗚呼ここにしも東西の
八つの灯火掲げつつ | 思想の潮渦巻きて
学徒吾等の抱りて立つ | 荒るる怒涛の地を打てど
岩根は固し学の塔 |
| (3) 楠の大木に風薫り
自由独立自治を求め | 萌ゆる若葉に陽は映えて
吉田山辺に学舎を | 今日廻り来ぬ記念の日
創めし大人を偲ぶかな |
| (4) 嵐雄叫ぶ唯中に
国敗るとも外国に | 学の自由を譲りてし
学の誉を弥高く | 不拔の信念君知るや
挙げし功を思わずや |
| (5) 朝靄曳きて黙深き
比叡の大嶺を背にし | 巷を覚ます時の声
光を高く掲ぐる | 闇に暮れゆく都路に
吾が学塔に榮あれ |

(昭和28年6月18日学生歌公募入選作)

3 応 援 歌

中川 裕朗 作詞
多田 武彦 作曲

しんせい の いぶ きにみち て いぶ きにみち て
やくどう の わか きかいな に しょう りわかたん
まも れ まも れ まも れ ほこ う の
えーいーよ ー きょう ー ー と だい が
く きょう と だい が く

- (1) 新生の 息吹きに充ちて 息吹きに充ちて
躍動の 若き腕に 勝利分たん
守れ 守れ 守れ 母校の栄誉
京都大学 京都大学
- (2) 麗しき 吉田の里に 吉田の里に
幾星霜 鍛えし力 ここに尽さん
示せ 示せ 示せ 母校の伝統
京都大学 京都大学
- (3) 公明の 日輪のもと 日輪のもと
高鳴るは 希望の凱歌 自由の潮
たたえよ たたえよ たたえよ 不滅の光
京都大学 京都大学

(昭和33年制定)

4 逍遙の歌

沢村胡夷 作詞作曲

- | | | |
|--|--|---|
| (1) 紅萌ゆる岡の花
早緑匂う岸の色
都の花に嘯けば
月こそかかれ吉田山 | (2) 緑の夏の芝露に
残れる星を仰ぐ時
希望は高く溢れつつ
我等が胸に湧きかえる | (3) 千載秋の水清く
銀漢空にさゆる時
通へる夢は崑崙の
高嶺の比方ゴビの原 |
| (4) ラインの城やアルペンの
谷間の氷雨なだれ雪
夕はたどる北溟の
日の影暗き冬の波 | (5) 嗚呼故里よ野よ花よ
ここにも萌ゆる六百の
光も胸に春の戸に
嘯き見ずや古都の月 | (6) それ京洛の岸に散る
三年の秋の初紅葉
それ京洛の山に咲く
三年の春の花嵐 |
| (7) 左手の文にうなづきつ
夕の風に吟ずれば
砕けて飛べる白雲の
空には高し如意ヶ嶽 | (8) 神楽ヶ岡の初時雨
老樹の梢伝う時
檠灯かかげ口桶む
先哲至理の教にも | (9) 嗚呼又遠き二千年
血潮の史や西の子の
栄枯の跡を思うにも
胸こそ躍れ若き身に |
| (10) 希望は照れり東海の
み富士の裾の山桜
歴史を誇る二千載
神武の児等が立てる今 | (11) 見よ洛陽の花霞
桜の下の男の子等が
今逍遙に月白く
静かに照れり吉田山 | |



紅もゆる歌碑